
お嬢様と執事

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

お嬢様と執事

【Nコード】

N1928E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

性格以外は完璧なお嬢様四条紗智子に仕える執事島本正人。何やらお嬢様が変に企んでいるようだがそれは何か。ラブコメです。

第一章

お嬢様と執事

我儘勝手、この言葉が何よりも似合う。

同時に容姿端麗、眉目秀麗、文武両道といった言葉も当て嵌まるが彼女に似合う四字熟語はやはりこれであつた。少なくとも彼から見ればそうであつた。

四条紗智子、彼女は名門四条家の所謂御令嬢であり日本でもかなり有名なお嬢様学校に通つている。これ等の四字熟語が示すように文句なしのお嬢様である。ところがであつた。

性格は我儘で高飛車で勝手気まま、本当にこれで顔が悪ければ何もないといった人間であつた。そんな人間の執事なのがこの彼、島本正人である。

彼は元々代々四条家に仕えている。彼の父や祖父どころか曾祖父、いやそれより前から代々仕えているのだ。四条家は公卿出身で明治時代には華族としてみらびやかな栄華を誇つていたことで知られている。今も財界に大きな影響力を持っている。

そんな時代遅れの共産主義者から見れば打倒されるべき存在に彼は仕えているのだ。大学を卒業してすぐに紗智子の執事になった。この紗智子のごときは昔から知つているがどうにもこうにもその我儘さで手を焼き続けているのだ。

「島本さん」

「はい」

彼女は正人を島本さんと呼んでいる。彼の言葉は大抵その言葉に応えるところからはじまる。

「明日の用意はできまして？」

「既に」

畏まつて彼女に答える。学校の帰りにもう迎えの車を校門に持つて来ている。運転手をその車の中において執事姿に長身でその細面

の端正な顔に黒髪を後ろに丁寧に撫で付けた彼が車の後部座席の左のドアのところ立って恭しく待っていたのだ。見事なまでに絵になる姿であった。

「万端整っております」

「よろしくてよ」

彼のその言葉に素っ気なくこう返すのが常であった。その彼女といえは如何にもお嬢様学校といった地味ながら清潔感を感じさせる制服に豊かな茶色の髪をたなびかせ切れ長でそれでいて二重の瞳に自信をみなぎらせ白い卵のそれに似た形の顔に整った高い鼻と紅のやや大きめで薄い唇を持っている。気品に満ち溢れ、それでいて高慢さも感じさせる美貌であった。

「それでは。今は」

「お屋敷に帰られるのですね」

「勿論。それでは」

「はい」

いつものやり取りの後で紗智子を車の中に入れ自分も入って車を進ませる。車の中では彼女は静かであった。しかし家に帰ると。

「島本さん」

馬鹿に広い庭を持つ左右対称の緑の庭を抜け西洋、しかも十九世紀イギリスのそれを思わせる大きな屋敷の門をくぐりこれまた豪華な屋敷の中に入るとすぐに紗智子また彼を呼ぶのであった。

「はい。何でしょうか」

「すぐにあれの用意をして下さる？」

「あれですか」

「そう、あれですわ」

あれとしか言わないのであった。

「宜しいですわね」

「畏まりました」

正人は静かに紗智子の言葉に頷くとすぐに姿を消した。そうして暫く経ってから持って来たものは小さな木製の小箱であった。

「お待ちせしました」

「遅いですわね」

礼を述べるのでもなくそう文句を言うのだった。その間表情を変
えることはない。

オルゴールを受け取ると静かに姿を消した。その時にまた正人に
対して言う。

「いつも通りに」

「七時でございますわね」

「それはもうわかっていている筈ですわ」

またきつい声になっていた。

「宜しいですわね」

「はい、それでは」

正人の一礼を受け流すようにして二階の自分の部屋に向かう。自
分の手でその櫛の木の扉を開けるとその中に消えた。正人はそれを見
送っていたが扉が完全に閉まるとすぐにその場から姿を消した。彼
が向かうのは屋敷の中にある使用人達の控え室であった。そこは
控え室にしては豪華なもので屋敷の中の空いた部屋を使っているこ
とがわかる。そこにメイドやシエフ、運転手達が座つてめいめいテ
レビを観たりゲームをしたりお菓子やお茶を楽しんでいた。かなり
楽しんでいると言えた。

「ふう」

「ああ、お帰りなさい」

「島本さんお疲れですわね」

「いや、疲れますよ」

正人は彼に声をかけてきた若いメイドの佳澄に言葉を返した。表
情にもはつきりとした疲れが見えていた。

「お嬢様の執事というものも」

「そうですね？」

「疲れませんか？」

「楽だよね」

「ねえ」

それを聞いた佳澄は隣でチョコレートクッキーを摘んでいる同僚に顔を向けて声をかけた。その同僚も彼女に同意して頷くのであった。

「お嬢様お優しいし」

「よく気が利かれる方ですし」

「何処が？」

だが正人はメイド達のその言葉に顔を顰めさせて言い返すのであった。彼にしてみれば彼女達の言葉は何処が、といった感じだったのだ。

「あのお嬢様の執事になってから大変なんだけれど」

「そうなんですか」

「大学を出てすぐにこの家にお仕えしたけれどさ」

これは彼の家の決まりであつた。学校を出たらすぐにこの家に仕える。そうして代々生きてきているのである。なおこの部屋にいるメイドや運転手達も同じなのだ。だから彼等はこの四条家にとっては家族も同然なのである。正人もこのメイド達や運転手達のこととはそれこそお互い若い頃、赤ん坊の頃から知っている。当然紗智子に關してもだ。彼はその紗智子に対してまた言うのだった。

「昔からの御気性がさらにきつくなつていて」

「お嬢様昔からとてもお優しいですよ」

「そうですね」

だがメイド達はまた彼に対して言う。

「何かの間違いではないですか？」

「それは」

「そうかな」

正人は彼女達の言葉に首を捻りながら空いている席につく。それから側にある冷蔵庫からアイスクリームを取り出してそれを食べるのであつた。バニラのアイスだ。

「僕昔からお嬢様に振り回されて」

「そうなんですか」

「大変だったけれど。執事になってから余計に」

「そういえばどうして島本さんがお嬢様の執事になったか知ってます?」

「さあ」

佳澄の言葉に首を傾げる。

「それは知らないけれど。そういえばお嬢様には今まで執事なんていなかったし」

「お兄様方やお姉様方に執事がつけられたのは大学を出てからですよね」

「うん、そうだったね」

実は紗智子は四条家では末っ子だ。上に兄が四人、姉が二人いる。一番上の兄とはかなり離れている。

「けれどお嬢様はまだ高校生。どうして」

「お嬢様が旦那様と奥様に特別に御願いしたんですよ」

「えっ!?!」

正人はそれを聞いて思わず声をあげて同時に今食べているアイスクリームにスプーンを突き立てたまま動きを止めてしまった。

「そうだったの」

「御存知なかったんですか」

「初耳だよ、そんなの」

彼は驚いた声でまた言葉を返した。

第二章

「何でまたそんなことを」

「しかもですよ」

佳澄達は女の子らしい明るい笑顔を浮かべながらまた彼に話す。

「御指名でしたし」

「御指名って。じゃあ」

「はい、島本さんです」

「何か凄いことですよね」

「何でまた僕が」

正人にとってはいい迷惑であつた。大学を出たらこの家で働くことはわかつていたが運転手か何かだと思つていたので。ところが執事でもそれは紗智子のだ。何もかもが彼にとっては迷惑な話であつたのだ。

「さあ。何故でしょう」

「そこまではわかりませんが」

「わからないんだ」

「まあまあ島本君」

それまでテレビで競馬のゲームを楽しんでいた運転手の尾木さんが彼に声をかけてきた。なおその手も目もゲームに向けたままだ。

「仕事自体は楽じゃないかい？」

「いえ、全然」

正人は彼の言葉に無然として答えるのであつた。

「困つてるんですけれど」

「お嬢様のお相手だけじゃないか」

「それが大変なんですよ」

そのむつとした顔でまた言い返す。

「朝から晩まで。本当に」

「我儘だつて？」

「口では言えませんがね」

「いや、もう言ってるのも同じだし」

尾木さんの言葉も容赦がない。

「しかし。わしもお嬢様は我儘だとは思わんがな」

「何ですか」

「だから。佳澄ちゃん達と同じさ」

「そうですね」

佳澄は今度は置いてあるファッション雑誌を読んでいる。かなり生活を楽しんでいる感じだ。

「休憩時間はかなり多いしお給料はいいし」

「それはそうだけれど」

実際そうした面ではかなり待遇のいい正人である。しかも食事は朝昼晩にいいものが出る。おまけに周りは昔から知っている人達ばかりで所謂旦那様、奥様といった人達にも可愛がってもらっている。そうした面ではまるで天国にいるような待遇であるのだが。

「お嬢様の何処が悪いのかね」

「そうですね」

また佳澄達が言う。

「四条家はどの方もお優しい方ばかりですけれど」

「紗智子お嬢様は特にですよ」

四条家は名家でありその教育も昔ながらの華族のものをそのまま行っておりかなり厳しいのだ。だから紗智子の立ち居振る舞いもかなり気品があり優雅なものになっている。ただし性格は正人の目から見ればそれだけは全く教育の結果が見えないものになっている。

「それでどうして」

「島本さんがそう仰るのかわからないですよ」

「何でわからないんだらう」

正人は皆がわかってくれないので遂にこつばやきだしたのであった。

「皆お嬢様のことが」

「わからないっていうか」

「ひよつとしてそれって」

メイドの娘達が彼の話聞いて言う。

「島本さんだけに対してなんじゃないですか？」

「ねえ」

「そうかな」

「いや、案外そうかもな」

尾木さんもメイドの娘達の言葉に賛同してきた。

「実際のところわからんぞ」

「それだとしたらまた何でなんでしょ」

「そこまではわたしにはわからんさ」

そうは言いながらも思わせぶりな笑みを正人に見せてきた。

「まあ暫くは様子見だな」

「様子見ですか」

「まさかとは思うがいきなり確信するとかはないよな」

「ええ、それは」

それに関しては正人の方から否定した。きっぱりとした言葉でそ

れは否定するのだった。

「ありませんから。安心して下さい」

「だといいいんだよ。じゃあまずは様子見だな」

「わかりました」

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか」

「見物よね」

「何か君達楽しんでない？」

佳澄達の言葉にそう突っ込んだ。

「気のせいだといいいけれど」

「いえいえ、楽しんでますよ」

「これからどうなるのかなって」

「何だよ、趣味が悪いな」

「まあ気にしないで下さい」

「こつ見えても私達は」

くすくすと楽しそうに笑いながらの言葉であった。

「島本さん応援しているんですよ」

「ですから。頑張ってくださいね」

「応援してくれるの？本当に」

正人には信じられない言葉だった。何しろ楽しんで見ていると今さっきはつきり言っていたのけた娘達である。信じられないのも無理はなかった。

「そうですよ」

「とにかく前向きに御願いますね」

「前向きにか。どうもね」

「ああ、そうそう」

また尾木さんが正人に声をかけてきた。

第三章

「彼女とは上手くいってるかね」

「ええ、まあ」

この家の所謂婆やさんの孫娘と付き合っているのだ。彼女は紗智子の姉貴分みたいな存在であり何かと彼女と仲がいいのだ。名前は里佳子という。落ち着いた感じの美人だ。紗智子とは全く違うタイプで流石はこの家の婆やさんの後継者と言える大人の女である。

「落ち着いたら結婚なんてことも考えたり何かしてます」

「えっ、島本さん結婚するんですか!？」

「里佳子さんと」

「まあそのつもりだけれど」

一応メイドの娘達にも答える。

「悪いかな、それって」

「悪いっていかお似合いですよ」

「執事と婆やさんって組み合わせが如何にもお屋敷って感じで」

「そうなるんだ」

彼女達の言葉にまた妙に納得するようにならないような感じになる。

どう述べていいのか彼は自分ではわかりかねていたのだ。

「いい組み合わせですよ」

「私達そつちも応援させてもらいますね」

「できればこつちだけを応援して欲しいんだけどな」

これは彼の本音である。

「まあいいさ。とにかく今は」

「紗智子お嬢様だね」

また尾木さんが言葉を述べる。

「そうですね。それじゃあ」

「しかし。まああれだよ」

尾木さんは相変わらず競馬のゲームをしながら正人に言うのだっ

た。

「お嬢様は決して悪い人じゃないからね」

「そうなんですか」

「そうだよ。だから安心していいよ」

「お嬢様を悪く言う人なんていませんよ」

「そうですよ」

佳澄達もまた紗智子を褒める。どうも正人だけが浮いてしまっていた。だがそれでも彼は言うのだった。

「それでも。少し様子を見てみるか」

そう決意した。そのうえであらためて紗智子の執事を務めるのだった。

「島本さん」

何かにつけて彼を呼びつけて使う。

「お茶を」

「クッキーを」

「新聞を」

「モーニングコールを」

「はい、只今」

「畏まりました、お嬢様」

その度に右に左に動き回る。屋敷の中で一番忙しい人間になっていた。

朝早くに起きて夜遅くに寝る。彼女がいない間は休めるが屋敷にいる間は本当に休みがない。彼はそんな中で紗智子の我儘に付き合っていたのだ。

それでも彼は文句一つ言わずに忠実に紗智子に尽くし続ける。執事という仕事への責務もあるがそれ以上に何とか紗智子の我儘の理由を知りたかったからだ。しかしそれにはかなりの忍耐力が必要で彼はそれと必死に戦っていた。

その戦いが続く中で。彼は疲弊しきった顔で控え室で休んでいた。そこにはメイドの佳澄がいて尾木さんがいた。ついでに佳澄の相方

のメイドの娘の茜もいた。だが彼女達は血色のいい顔でお茶やゲームを楽しんでいた。格差社会とはここにもあるのかといった感じの見事なコントラストであった。

「大分お疲れのようですね」

「否定できないね」

小柄でショートヘアの茜にこう答えた。

「正直。最近あまり寝てないよ」

「それはお嬢様も同じでは？」

「どうだか」

それには思いきり疑問符をつけて返す。

「夜遅くまで起きられて朝早くに起きられているけれどね」

「じゃあやっぱり」

「何でそんな生活をされるか意味がわからないよ」

「こつばやくのであった。」

「だってさ。学生さんなのにどうして」

「どうしてでしょうね」

「そういえば最近お嬢様」

「何かあったの？」

佳澄の言葉に顔を上げて問うた。

「よかつたら教えて」

「その里佳子さんとしょっちゅうお話されていますよ」

「彼女と」

「ええ。何かよく」

「へえ、そうなんだ」

茜はそれを聞いて今はじめて知ったような声をあげた。

「何でだろうね」

「ああ、そうか」

だが尾木さんはその話を聞いて納得した顔になった。相変わらずゲームはしたままであるが。そのゲームもいつもと同じ競馬のゲームである。

「成程な、そうか」

「成程って」

正人は今度は納得した顔になりながらゲームを続けているその尾木さんに問うた。

第四章

「何かわかったんですか」

「ああ、わかったさ」

答えはするが目はゲームから離れはしない。

「わかったが言わないよ」

「えっ、何ですか」

「私もわかりました」

「私もです」

尾木さんが答えないと言って戸惑っていると佳澄と茜も言った。
た。

「そういうことだったんですね」

「お嬢様も真剣なんですネ」

「真剣！？何なんだよ」

「君もそのうちわかるよ」

尾木さんはこう言うだけでやはり答えはしない。

「嫌でも最後には教えてもらえるさ」

「教えてもらえるって」

「島本さん鈍感過ぎますよ」

「ねえ」

「ちよつと待ってよ」

面と向かって鈍感と言われては正人もいい気はしない。口を尖らせて二人に言う。

「何で僕が鈍感なんだよ」

「それがわからないからですよ」

「だからお嬢様だって」

「何で僕が鈍感だとお嬢様が関係あるんだよ」

余計に話がわからなくなる正人だった。口を尖らせるだけではなく眉も顰めさせている。そんな顔なので今飲んでいるココアが妙に

まずい。苦く感じた。

「訳わからなくて仕方ないよ」

「だからそのうちわかるんだよ」

また横から尾木さんが言うてきた。しかしここでもゲームの画面から顔を離さない。

「そのうちね。安心していいからね」

「そうなんですか」

「私達は正人さん応援していますよ」

「だから安心して下さいね」

「そつちもそうは見えないし」

首を傾げて出した言葉は本音であった。

「お嬢様ばかりよいしょしてるような」

「本当にわからないんですか!？」

「こりゃ重症だ」

「僕は病人だったんだ」

何故か彼女達の間ではこうなっていることを感じた。

「何がもう何だか」

「だから安心するんだよ。最後に全部わかるからね」

「もう全然何もかもが」

正人は首をまた傾げてココアのおかわりをする。しかし普段は甘いココアも苦くて仕方がない。そのココアを紗智子が頼んだのは彼女が学校に帰ってすぐのことだった。

「まずはミルクを入れましてね」

「はい」

メモを取りながら応えている。

「お砂糖を。お砂糖は」

「どのお砂糖にされますか？」

四条家では砂糖も様々なものを揃えているのだ。どれも特別に選んだ高級品である。

「沖繩のをですわ」

「沖縄のですか」

「そう。白砂糖を」

砂糖の種類まで注文をつける。

「それを小匙で三杯」

「三杯ですね」

「これが一杯分ですわ」

こう言い加える。

「それで二杯分御願いしますわ」

「二杯ですか」

「何か？」

「いえ」

二杯と聞いて違和感を感じたのだ。何故ならいつも彼女だけが飲み従って一杯分しか入れないからだ。彼はそれを不思議に思ったのである。ところが紗智子はそれに答えずにさらに言葉を続けるのであった。

「畏まりました」

「宜しいですわ。それですわね」

我儘な注文はさらに続く。

「ココアはお部屋の中ではなく前に置いておきなさい」

「前にですか」

「そう。ワゴンの上に置いて」

注文はこうであった。

「コップは二つ。オーストリアのものを」

「畏まりました。むっ!？」

ここでまたあることに気付いた。

「コップを二つですか」

「お皿も。スプーンもですわ」

やはりここでも正人には何も言わせない。自然に言葉を続けてそれをさせないのだ。

「スプーンはイギリスから取り寄せたあれを」

「銀のあのスプーンですか」

「それも二つですわ」

しつこい位に言い加えてくる。

「宜しいですわね」

「畏まりました。それでは」

「十分以内に」

今度は時間まで指定してきた。

「扉をノックしてその前においたら下がりなさい。宜しいですわね」

「お部屋には」

「入ってはなりません」

声が厳しいものになった。絶対に許さない言葉であった。

「おわかりですね」

「わかりました。それでは」

「わかつたら十分以内に」

また厳しい声で正人に告げた。

「わかりましたね」

「はい。それでは」

こうして正人に急いでココアを淹れさせて持って来させる。十分で持って来た正人は紗智子の扉の前に立つ。ノックしようとする。何故か部屋の中から話し声が聞こえてきた。

「！？携帯でも使われているのかな」

そうは思ったがやはり扉は開けなかった。ただ言われたままに扉をノックするだけだった。

第五章

「!？」

すると扉の向こう側でビクリ、とした感じが伝わった。彼はそれを感じてまた顔を顰めさせるのであった。どうもおかしいと思ったのだ。

「ココアです」

「え、ええ」

何故か応える紗智子の声が焦ったものになっていた。それは正人にもわかった。

「わかりましたわ。それでは」

「扉の前に置いておきますね」

「ちゃんと二つずつ持って来ましたわね」

「はい」

正人は素直に扉越しに答えた。

「全て揃えて」

「わかりましたわ。それでは」

彼女はそれを受けて言葉を返してきた。

「そこに置いて去りなさい」

「畏まりました。それでは」

正人はココアを置くとそのまま姿を消した。彼はこのまま姿を消して見なかったが扉から出た紗智子はそそくさとココアを置いたそのワゴンを部屋の中に入れた。そうしてまた部屋の中で話をするのだった。

「さあ、持って来ましたわ」

彼女はにこりと笑って部屋の中に顔を向けている。

「お話の続きを」

「はい」

何故か声はにこにこしたことしたのであった。その中で彼女は話をす

る。しかし正人はそれを知らない。彼だけが何も知らず何も察していなかったのだ。

正人は相変わらず紗智子の我儘の相手をし続けている。それでいい加減疲れがたまってきたところまで急に携帯に電話がかかってきた。

「はい」

「あつ、正人君？」

彼をこの呼び方で呼ぶのは一人しかいない。

「元気にしてる？」

「元気にしてるって」

彼は苦笑いを浮かべて彼女に応えた。携帯の相手に対しての笑みだ。

「いつも会ってるじゃない」

「それもそうね」

「そうだよ。だって同じ場所で働いているんだし」

彼のその付き合っている相手の里佳子である。紗智子のお姉さんみたいな存在のその彼女だ。正人にとっては一番電話をかけて欲しい相手である。

「わかってるんだろ？それは」

「ええ、まあ」

電話の向こうの声は笑っていた。

「わかっていたけれどね」

「じゃあ何で電話をかけたきたのだ？」

「これは挨拶よ」

また笑って声をかけてきた。

「それでね」

「うん」

「今度の休みだけれど」

話は彼女のペースで進む。何時の間にかそうになっていた。身体の方は大丈夫かしら

「大丈夫って？」

「疲れとか溜まってない？」

「そう彼に問うのであった。」

「最近どうかしら」

「あつ、大丈夫だよ」

紗智子の我儘のことは話さずにこう答えた。

「全然。平気だからね」

「平気なの」

「うん、全然平気だよ」

声はあえて笑ったものにさせていた。これは芝居であった。

「そうなの。よかったわ」

「よかったって。何かあるの？」

「そう、それなの」

また話が変わる。やはり里佳子のペースだ。

「その今度の休みだけけどね」

「うん」

「どう？遊園地でも」

「遊園地だね」

「いいかしら。それが映画館か」

「どちらでもいいよ」

穏やかな声で彼女の提案に答えた。

「里佳子さんがいいところだね」

「そう。それじゃ映画館にしましょう」

里佳子の案を通った。といっても彼女だけが提案して正人は何も言っていないが。実は女の方が強いカップルであったりするのだ。なお二人は同じ歳である。

「それでかしら」

「いいよ。それじゃあそれでね」

「うん。じゃあそういうことで」

笑って電話の向こうで頷く。話が終わると里佳子は彼に別れを告

げて電話から消えた。電話が終わると正人はまた疲れた様子を見せるのであった。

「まあとにかく」

その疲れた声で一人呟く。

「お嬢様の我儘とはまた別だし。頑張るか」

そう呟いてデートに思いを馳せる。彼は紗智子の我儘に耐えながらデートに備える。そしてすぐにそのデートに日になるのだった。

黒く長い髪を後ろで一つに束ねたほんわかした感じの白い顔の大人の女性だ。優しい目元が美しい。目だけでなく口元も整い身体全体にほのかな色気を漂わせた美人だ。服は白い丈の長いワンピースで包んでいる。白が似合う女の人だ。彼女が里佳子である。

「お待たせ。待ったかしら」

「うっん」

にこりと笑って里佳子に答える。実は三十分遅れだがそのことは言葉にも出さない。しかし妙だとは心の中で思っではいた。

(どうしてなんだろう)

彼が不思議に思うことは里佳子が遅れたことについてだ。実は真面目な性格で時間に遅れることはない。しかし今日は遅れてきた。それが不思議なのだ。

(まあいいか)

しかしそれについて考えるのは止めた。そうして彼女とのデートをはじめのだった。

デートをはじめてみると里佳子の我儘はいつもよりも酷かった。

酷いというよりはいつもはおしとやかで正人を立ててくれるのに今日は違っていたのだ。あれが食べたいこれが欲しいと次から次に言うのだ。

「ハンバーガーが食べたいわ」

「缶ジュース飲みたいの」

「あっ、あのネックレス買って」

「ちょっとコンビニ寄らない？」

「うん、いいよ」

その我儘に全部応える。しかしその我儘がどれもチープなものでありしかも彼女が普段あまり入らない場所にばかり入るので正人はそのことを不思議に思う。だがそれもやはり何も言わず彼女に合わせる。合わせているうちに何時の間にかメインの映画館も終わり帰り道に入った。すっかり暗くなった帰り道を二人で歩いていると不意に携帯が鳴るのだった。

「はい」

「私ですわ」

紗智子の声がした。

「すぐに来て欲しいのですけれど」

「何でしょうか」

それを聞いて紗智子に問うた。内心また我儘かと思ったがそれは出さない。ただ問い返しただけである。

第六章

「すぐに屋敷に帰って来て欲しいのです」

「何の御用件でしょうか」

「ありませんわ」

またいつもよりも酷い我儘であった。

「ないと申しますと」

「ですから理由はありませんの」

電話の向こうの紗智子はまた彼に言うのだった。

「ですが帰って来なさい。今すぐに」

「あの」

後ろから里佳子の声がする。

「何かあったの？」

「あつ、ちよつと」

「いいですか島本さん」

紗智子はまた彼に言ってきた。その高飛車な調子で。

「貴方は私の執事。ですから休日でも何でもデートをしている時でも」

「お嬢様」

執事という言葉が所謂ブロックワードになった。正人はその言葉に反応した。それで急に態度を厳格なものにして彼女に答えるのであった。

「確かに私は執事です」

「はい」

何を今更といった色が入った返答を紗智子はしてきた。

「ですから」

「確かに執事です。ですが」

「ですが？」

「私は今大切な人の為にいます。暫しお待ち下さい」

「暫しとは」

「大切な人を一人にするわけにはいかないのです」

言葉が毅然としたものになっていった。いつもの正人のそれではなかった。普段の端整なものではなく毅然としたものになっていったのだ。

「大切な人を」

「そうです」

その毅然とした声で答える。

「それに今は休日です。ですから」

「来ないとしても？」

「それも違います」

それも否定するのであった。

「まずは彼女を送ってからです」

「私よりもなのね」

「はつきりと言わせて頂きます」

ここまで来たらもう覚悟はできていた。だから迷いはなかった。

そのまま一直線の調子で紗智子に対して言うのだった。本当に一直線だった。

「一人の女性を守れなくて何が執事ですか」

「一人の女性を？」

「そうです。里佳子さんを一人にしてはおけません」

また言い切ってきた。

「何があるうとも。ですから彼女を送ってから」

「それからだというのね」

「何があっても」

また言い切ってみせてきた。

「まずはそれからです。いいですね」

「ええ」

何とここで紗智子の返事は。

「合格ですわ」

「えっ!？」

今の言葉には正人も驚きを隠せない。何を言われたのかと思った。
「今何と」

「だから。合格だと言っているのですわ」

今度の言葉は電話からの言葉だった。直接の言葉である。その言葉と共に何と二人の前から紗智子が出て来た。左手からゆっくりと豪奢な絹の白い服を着ている。

「お嬢様」

「よくここまで私の出した試験に合格しましたわね」

紗智子は腕を組み自信に満ちた笑みを浮かべていた。その笑みをたたえた顔で以って正人に対して言うのであった。正人は彼女のその顔を見て呆然としていた。

「合格つて」

「おかしいと思いませんでしたの？」

紗智子はまた正人に言ってきた。

「私がどうして貴方にだけそう言っているのか」

「それは」

「そういうことだったのでしてよ。全ては」

「あの、それですわね」

彼は何が何なのか全くわからないまま紗智子に問うのであった。

本当に訳がわかっていない。しかし紗智子は全部わかっている顔であった。

「何が合格なんですか」

「里佳子さんと結婚されるんですわね」

「あっ、はい」

そのつもりだ。だからその言葉には素直に頷いた。

「そうですけれど」

「それを聞いてのことですの」

また一つ謎を出してきた。正人にとってだけの謎であった。

「だからこそ私が里佳子さんにお話して」

「お話？」

まだ正人には話が見えない。完全に見えないで訳がわからなかった。

「完全に話がわからなくなってきたんですけれど」

「あら、鈍いこと」

このことに慥然としてきた。どうも正人が話をわかっていないのに苛立っているようである。その顔で以ってまた言うのであった。

「それもこれも里佳子さんの為ですよ」

「里佳子さんの」

「ええ、ですから」

また言ってきたのだった。

「貴方をテストしていましたの。里佳子さんに相応しい殿方かどうか」

「！？じゃあ今までののは」

ここまで話されてようやく事情がわかったのであった。いい加減正人も話がわかってきたのだ。それに合わせて紗智子はまた言う。

「そういうことですの。殿方は女性に対して寛容であれ」

「寛容でって」

「多少の我儘は許せないと駄目ですよ」

そういうことであつた。だがそれを聞いても正人は釈然としないものを感じていた。そしてそれを口に出さずにはいらなかった。

「多少、ですか」

「多少ですわ」

これは紗智子の主観である。主観なのでかなりいい加減ではある。しかも正人にとっては到底多少とは言えないレベルではあつた。

第七章

「その多少の我儘を受け入れることができてる」

「はあ」

「しかも何があっても守り抜く。殿方とはそうあるべきですの」

「それで今まで我儘を仰ったり今のことも」

「はい」

ここまで話して頷いてみせてきた。

「おわかりですわね」

「わかりましたよ」

ようやく全てがわかった。話を聞いてみるとどうとどうということはない。しかも不機嫌にさせる話だった。とんでもないテストである。

「ようやく。これで」

「わかりましたら。里佳子さん」

今まで二人を見ているだけだった里佳子に声をかけてきた。

「貴女に相応しい方ですよ。お幸せに」

「有り難うございます」

里佳子は彼女のその言葉を受けてにこりと笑うのであった。

「何から何までして頂いて」

「全部里佳子さんメインなんだ」

「当然ですわ」

また紗智子独特の人生哲学が炸裂する。

「女性を花だとすると殿方は蝶」

「蝶ですか」

「ですがその蝶を飾り立てるのは花」

どうにも意味深いがわかりにくい言葉であった。

「そういうことですよ」

「わかったようなわからないような」

「わからなくても島本さんはテストに合格しましたわ」

それは保障してみせてきた。

「ですから御安心を」

「わかりました。それでは」

「ただ。一つだけ言っておきますわ」

また紗智子が言ってきた。今度は厳しい口調と視線になっている。

「何でしょうか」

「決して里佳子さんを悲しませないことですわ」

それを厳しい調子で言ってきた。

「宜しいこと？」

「は、はい」

里佳子はその調子に気圧されながら応える。

「殿方は女性を守るもの」

「はい」

言葉が繰り返し返しになっているがそれに応える。ここで反論をすればまた何を言われるかわかったものではないからだ。紗智子にはそこまでの言葉の力があるのだ。

「ましてや悲しませるようなことがあつてはなりませんの」

「常に笑顔を、ですか」

「勿論」

それは当然ときた。

「だからこそ。悲しませたその時は承知しませんことよ」

「わかりました」

その言葉には素直に一礼する。執事の礼になっているのは職業からであつた。

「決して里佳子さんを悲しませることはありません」

「その言葉、忘れてはなりませんよ」

「無論です。決して」

「誓えば必ずそれを果たす。宜しいですわね」

「はい、必ず」

今あらためて紗智子に対して誓う。だがその誓いは彼女にだけ向

けられたのではなかった。ここで彼は里佳子も見るのであった。

「そして里佳子さんにも」

「そうですね。私になぞ誓わなくてもいいのです」

そして紗智子もそれを言う。

「わかりましたわね」

「はい、それではそのように」

また頷く。頷くその顔は執事としてではなく島本正人としての顔でのものだった。頷くとそれで話が終わりではなかった。また紗智子は彼に対して言った。

「一生ですわよ」

「一生里佳子さんを」

「殿方の誓いは永遠でなくてはなりませんの」
それをまた言う。

「だからですわ」

「一生ですか」

「そうですね。わかりましたわね」

「はい、それも」

「宜しい。それでは」

紗智子はここまで言うつと踵を返した。彼女が踵を返したところで彼はあることに気付いた。

「お嬢様」

「何でして？」

悠然と正人の方を振り向いて述べてきた。

「あの、ひよっとしてですね」

彼はおずおずと紗智子に対して言う。

「ボディーガードは誰もおられないんですか？」

「いえ」

しかしそれは否定してきた。

「それはちゃんといますわ」

「ですが今は」

周りには誰もいない。少なくとも正人の目にはだ。

「誰も連れては」

「ボディーガードは別に姿を見せる必要はありませんわよ」
しかし彼女の態度はここでも平然としたものであった。

「おわかりですか？」

「何が何なのかわからないんですけど」

「どうしても見たいのですね」

正人がどうしてもわからないようなので言い返してきた。

第八章

「お嬢様御一人で夜に出られるなぞあまりにも危険です」

「私とて何もしていないわけではありませんわよ。それに今何も姿を見せる必要はないと言いましたわね」

「ええ、まあ」

それは事実であった。少なくとも彼女にとってはそうである。

「では。御見せ致しますわ」

そう言つと左手を掲げて指を鳴らす。すると彼女の後ろから黒い服の男達が現われたのであった。

三人いる。そしてその三人が何者なのか正人は知っていたのだった。彼等の名を口にする。

「伊吹さんに郷原さんに若本さん」

「そういうことですわ」

三人共所謂四条家のお庭番である。正規のボディガードとは別に控えている言うならば陰のボディガードなのである。その三人が紗智子と一緒だったのだ。

「だから安全ですよ」

「そうでしたか」

「おわかりでしたらこれで」

紗智子はその三人を連れたまま前に向き直した。そうしてその場を後にする。

「一つ言っておきますわ。私は今の誓いは忘れませんわよ」

「はい」

正人は紗智子のその言葉にまた頷いた。

「それでしたらこれで。また明日から御願いますわ」

「わかりました。それでは」

「ただ。明日からは」

紗智子の声がかすりと笑ってきた。

「我儘もありませんわよ」

「えっ、本当ですかそれは」

これは彼にとつては喜ぶべき言葉であつた。何しろ今までそのことで散々悩まされ苦勞させられてきたからだ。だから今こうして他ならぬ彼女の言葉を誰よりも喜んでいるのだ。

だが紗智子は決して嘘は言わない。それがわかつているから余計に嬉しい。その嬉しさを感じだしている彼に対してまた紗智子が言うのだった。

「おわかりでしょうけれど私は嘘は言いませんわよ」

「そうですね」

「ですから御安心なさい。それではまた明日」

「はい。また明日」

こう言い合つて別れた。二人になつた正人はあらためて里佳子に顔を向ける。そのうえで彼女に対して穏やかな笑みと共に言うのだった。

「じゃあ。帰ろうか」

「ええ」

里佳子はいつもの穏やかな笑顔で頷いてきた。

「一緒にね」

「そう、何時までも一緒にね」

先程の紗智子の言葉を繰り返す形になる。

「帰ろうよ」

「帰るだけじゃなくてね」

里佳子はこうも言ってきた。

「何をするのも一緒にね」

「そう。お嬢様に誓つたように」

そこが強調される。それは二人一緒だった。

「僕は里佳子さんを守つて」

「私は正人君を輝かせてね」

笑顔でそう言い合いながら帰路につくのだった。その誓いが永遠

になることをこれまた誓いながら。二人一緒に歩くのであった。

それから紗智子の我儘はなくなった。これもまた彼女の言った通りであった。しかしある日。佳澄と茜がふと彼女に対して屋敷の中で問うのだった。この時彼女は庭の白いテーブルに座ってくつろいでいた。その彼女に対して控えていた二人が紅茶を入れるついでに尋ねたのであった。

「あの、お嬢様」

「何でして？」

紗智子は優雅に二人に言葉を返してきた。その前には紅茶を入れた白い陶器のカップだけではなく狐色に焼かれたクッキーも置かれていた。それを一つつまみながら二人に応えたのである。

「島本さんのことですね」

「ええ、それが何か」

今正人は奥で他の用事をしている。それで彼がいないことを利用しての話であった。

「お嬢様のあれはテストだったんですね」

「そうですね」

紗智子の我儘のことである。

「それが何か？」

「いえ、そうだったらいいんですね」

「それで」

二人はそれを聞くのであった。

「御安心なさい」

紗智子は二人を安心させるように言うのであった。

「私は我儘を忌み嫌っておりますわ」

「ですよね」

「ではあの時は」

「人は嫌っていても」

ここで彼女は真面目な言葉を述べた。

「時としてそれをしなくてはならない時がありましたよ」

「そうですね」

「それは確かに」

彼女達もそれは実感できた。時として嫌な仕事をしなければならなかったり嫌な客の応対をしなければならぬからだ。メイドも何かと大変なのだ。

「そういうことでしてよ」

「ですか」

「ええ。これでおわかりですね。ただ」

しかしここでまた紗智子は言うのだった。

「何ごとも素養がなくてはできませんわね」

「あの、それって」

「つまり」

「さて」

しかし二人の問いにはあえて余裕の笑みを浮かべてそれを誤魔化すのであった。あっさりとかわした形になる。

「どうぞでしょうか。ところで」

「あっ、はい」

「お茶ですわね」

「はい、御願いますわね」

優雅に二人のお茶を受ける。そうして優雅なままでその場を過ごすのであった。己の中にある本当のことはあえて言わずに。そうして茶を飲むのであった。

お嬢様と執事 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928e/>

お嬢様と執事

2009年3月24日09時34分発行